

「読解力」を高める社会科の授業づくり

ー理解を深めるプロセス学習の在り方についてー

安城市立東山中学校 教諭 松岡 秀勝

はじめに

、2006年の国際学習到達度調査（P I S A）の結果では、どの分野も順位が下がったことや学習意欲が低下したことが指摘されている。また、文部科学省のゆとり教育が間違っているのではないかと報道されている。学力は本当に下がっているのか。あるいは、下がったとしたらその原因は何なのか。それについて、都留文科大学教授福田誠治氏は、次のように指摘している。「P I S A調査トップのフィンランドでは、答えを教え込む教育とか、正解を覚える学習をしていない。16歳まで他人と比べるようなテストはなく、点数や順位のための勉強はしない。子供は将来や生活を考えながら自ら学び、教員は一人一人に合わせ支援する。教員が質の高い授業ができ、工夫が生かされるように現場に自由が与えられ、授業準備に専念できる勤務条件になっている。P I S A調査は、これまで何を学んだかではなくこれから何ができるのかを測ろうとしたので、ちょうどこのフィンランドの子供たちの学びが探究的かつ実践的であることを発見したのだ」。

この指摘は、日本とフィンランドの教育スタイルの違いであり、社会の認識や学習環境の違いを分析の尺度に加えなければならないということである。知識を教え込む教育が、考えさせない教育に陥っていたということであり、それがP I S Aの順位を下げる結果につながっているという指摘なのであろう。本校の2年生の実態を考えても、既習の学習が定着していない生徒が多く、考える活動が成り立たないことがある。学力検査（「観点別学習状況」「評定」到達度診断テスト）の結果を見ても、社会科は全国水準を下回っている。とりわけ、意欲・関心は全国レベルを大きく下回っている。覚えねばならない知識の量が増えたことで、社会科への苦手意識が強まっているのだと思う。本研究は、こうした結果を踏まえて、基礎・基本を定着させ、思考・判断力、表現力を伸ばすことで、読解力を向上させていきたい。

1 研究の構想

(1) 読解力のとらえ

本研究では読解力を、「文字だけでなく図表やグラフまで含めた資料の意味を分析的・批判的に読み取り、解釈し、自分の意見として表現する力」ととらえている。社会科の学習をこの読解力の視点から眺めてみる。多くの生徒は社会科の学習を、人物や物事を正確にとらえ暗記することだと考えている。確かに必要な事柄を覚えることは大切だが、社会科の学習が暗記にとどまるわけではない。社会科の学習では数多くの資料に当たり、解釈し自分の意見をもち、考えを交流する中で社会的認識を深めていくことが大切である。つまり、読解力を伸ばすためには、授業の中で社会的事象を認識し、自分なりの考えをもち、言葉にまとめ、発表するという過程を踏むことが求められる。よって読解力の育成というのは、理解力、思考・判断力、表現力の三つの力をバランスよく育てることで達成されると考える。

ア 理解力（情報の取り出し・解釈）

・資料を正確に読み取り，そこから既習の知識や経験と結び付け，自分の意見を構築する力

イ 思考・判断力（熟考・評価）

・他人の意見と自分の意見を比較することによって，その違いを認めたり，自分の意見を修正したりする力

ウ 表現力（説明・論述）

・確かな証拠を基にして，積極的に自分の意見とその理由を表現する力

本研究では，学習形態の工夫を図り，事実認識→解釈→記述→発表（豊かな説明活動）という学習プロセスを通して，読解力を高めていく方策を考えた。そのために歴史学習を中心に，単元構想を十分に練り上げ，学習形態を工夫して，既習知識を用いて考えさせる場を複数回設定する。そして，理解の定着と思考・判断力と表現力の向上を図ることによって，読解力の向上を目指す。

（2）目指す生徒像

研究主題に掲げる生徒像を次のように考えた。

課題を正確につかみ，確かな根拠のある考えをもち，自分の考えを分かりやすく人に伝えることができる生徒

ア 意欲的に授業に参加し，学習課題に率先して取り組むことができる。

イ 歴史的事象を多面的・多角的に解釈し，確かな根拠のある自分の意見をもつことができる。

ウ 自他の考えを比較し，自分の意見に生かすことができる。

2 研究の方法

（1）研究の仮説

目指す生徒像を設定した上で，以下のような仮説を立てて研究を進めることにした。

I 歴史学習において，歴史事象への意識を高めさせ，人物や文化に対する関心を高めるような教材を提示し，個に応じた課題追究を支援すれば，生徒は歴史事象への理解が深まり，根拠のある確かな考えをもつことができるであろう。

II 学習プロセスの中で生徒同士がかかわり合う場面を設定し，多くの生徒の意見を交流する中で，基礎・基本が定着し，思考・判断力，表現力が伸び，読解力が育成されていくであろう。

（2）研究の手だて

読解力を高める授業づくりを目指して，生徒が自主的に活動や考えがもてるように，次のような手だてで研究を進めた。

ア 既習の知識を定着・活用する振り返りの場を設定し，意欲をもって課題追究ができる単元構成の工夫を図る。

イ 理解を助け，考えを深めるために，学習プリントを活用する。

ウ 資料を根拠に考えを述べたり，図や表を使って説明をしたりして発表することで理解の定着と表現力の向上を図る。

エ 疑問や感想を書く場面を設け，教師が朱書きなどで支援することによって，追究意欲が持続するようにする。

(3) 検証の方法

ア 学級全体の変容

アンケート結果や学習プリント、授業の様子や発言の内容を見て分析する。

イ 個（抽出生徒）の変容

生徒を抽出し、発言や学習プリントの内容などから変容を分析する。

3 研究の内容

(1) 第1次授業実践 対象1年8組 31名 平成19年11月実施

本単元は日本の歴史の中で、長く続いた戦乱の時代を終わらせるために、全国統一を目指した三人の武将について学ぶ。今までの世の中を変革するためには、新しい視点から社会を変えていく洞察力が必要になる。その点で三人の武将の行ったことを学習することは、これからの社会を生きる生徒たちにとって参考になることがあるだろう。また、学習プロセスを各時間だけでなく、単元の中でも重視し、最後に既習知識を基に自らの考えをまとめ、表現する「豊かな説明活動」を設定して理解力、思考・判断力、表現力を育成したい考えた。また、単元構想では、その時間で重点的に育てたい読解力を取り上げ表記した。

〔抽出生徒〕

生徒Aは、素晴らしい発想をもった生徒である。また、海外生活の経験や読書量が多いことから、知識も豊富である。しかし、マイナス発言も多く、クラスを安易な方向に引っ張りやすい。プライドが高く、頑固な性格で、安易に他人の意見を受け入れない面をもっている。そこで、学級の中でしばしば対立することがあった。意見を交換する活動の中で、他の考えも受け入れる人間的な心の広さを身に付け、同時に読解力を高めていきたい。

資料1 単元構想図

1 単元名 ヨーロッパ人との出会いと全国統一

2 単元構想（6時間完了）

生徒の現状 ・ 自分自身の考えをきちんと発表することが苦手な生徒		
出 合 う	キリスト教国の帝国主義について考えよう	【*読解力向上の手だて◆評価】
	① ヨーロッパ人の世界進出について考えよう *1 ・ヨーロッパの国々は植民地争いをしていたんだ。 ・キリスト教の分裂もあったんだね。 ・それがどのような影響を与えたか知りたいね。	*1 スペイン・ポルトガルが植民地獲得競争を行った理由をワークシートに説明する。(理解力) ◆1 ヨーロッパの植民地政策に気が付き、学習の見通しをもつことができる。
深 め る	南蛮人の来日と全国統一について考えよう	*2 鉄砲やキリスト教の伝来について調べた内容がはっきりするように出典を明らかにさせ、資料の活用や分類ができるように生徒に応じた指示を出す。(思考・判断力)
	② 南蛮人が伝えたものを調べよう *2 ・ポルトガル人が鉄砲を伝えたんだね。 ・ザビエルがキリスト教を伝えたんだね。	

③ 信長・秀吉の統一事業を調べよう * 3	* 3 信長と秀吉の統一政策の違いに着目して理解ができるように、図にまとめ考えるように促す。(表現力)
・信長は室町幕府を滅ぼした人なんだね。 ・秀吉は信長の政策を引き継いだんだね。	
④ 秀吉の政策と朝鮮侵略を考えよう * 4	* 4 全国統一を成し遂げた後、朝鮮に進出を考えた秀吉の意図を引き出す。(思考・判断力)
・秀吉の政策は検地と刀狩だよ。 ・朝鮮侵略はどんな目的があったのだろう。 ・戦国時代は信長や秀吉の力で終わりになったんだ。	
桃山文化について考えよう	
⑤ 桃山文化の特色について話し合おう * 5	* 5 具体的な特色を挙げ、桃山文化について考える場とする。(思考・判断力)
・外来語がたくさん伝わったよ。 ・南蛮風の服装は派手だね。	
⑥ 全国統一に最も有効な政策を話し合おう * 6	* 6 豊かな説明活動 全国統一に最も有効な政策は何か パネルディスカッションによって深め合う。(理解力, 思考・判断力, 表現力)
・産業を発達させた楽市・楽座の政策だよ。 ・農民から武器を取り上げた刀狩だよ。	
・発表を聞いて、統一の有効な政策が分かったよ。	
熟達していく生徒の姿 ・既習の学習を基に資料を活用して意見が言える生徒	

資料2 パネルディスカッションの構想 (第6時)

本時の目標

- ・全国統一に最も有効な政策について話し合い、理解を深めることができる。

展開

学 習 活 動	教師の支援と留意点
1 全国統一に最も有効な政策について各パネラーから発表する。 全国統一に最も有効な政策について発表したり聞いたりしよう	○パネラーには、全国統一に最も有効な政策について分かりやすく発表ができるように以下の視点を与える。 ・なぜ最も有効な政策であると考えたか。 ・その根拠(事実)は何か。
2 発表を聞いて質問する。 発表を聞いて分からないことを質問しよう	○発表を聞いて、疑問に思ったことや分からなかったことを確認しながら話し合いができるようにする。
3 自分が全国統一に最も有効な政策であると思うことを発表する。 あなたが全国統一に最も有効な政策だと思うことは何ですか	○パネラーの意見を踏まえ、学級全体の話し合いにつなげていく。話し合いでは、信長や秀吉の政策を中心に、より重要な政策についての話題に広げていきたい。

4 全体の意見を聞き、その感想を発表する。 友達の意見を聞いて、あなたはどう思いましたか	○自分が最初に考えた政策が全体の話し合いの中でどの程度重要であり、どのように扱われたかに気づき感想が書けるようにする。
5 本時を振り返ろう。 全国統一に有効な政策を、本時を振り返っておさえましょう	○全国統一に有効な政策は一つだけではなく、様々な政策がうまく合致することによって統一が実現したことに気づき、信長や秀吉の発想の素晴らしさや全国統一にかける意気込みについて理解できるようにする。

評価

評価方法	おおむね満足できる (B)	十分満足できる (A)
・ワークシート ・授業の発言	既習のことから、自分自身の考えをもち、全国統一を実現した政策について話し合い、理解を深めることができる。	全国統一は、一つの決定的な政策だけでなく、様々な政策がうまく合致することで実現したことを理解することができる。

ア 第6時 パネルディスカッション (全国統一に最も有効な政策とは)

信長・秀吉が行った政策や戦いの中で、全国統一に最も有効であったことは何であるかを話し合うために、単元のまとめの時間としてパネルディスカッションを行い、読解力を高めようと考えた。生徒が有効だと考えたのは、以下の政策・戦いである。

- ①楽市・楽座 ②刀狩 ③太閤検地 ④関所の廃止 ⑤高松城の水攻め(兵糧攻め) ⑥長篠の戦い ⑦鉄砲の伝来 ⑧キリスト教の伝来 ⑨一向一揆の撲滅

これを画用紙にまとめ、発表することにした。まとめるときには、少し大きな字ではっきりと書くように指示し、根拠となる資料や理由を示すように工夫させた。パネラーは、学力の中・低位の生徒がよく分かり、よいまとめ方の例を示すことができるように上位の生徒を選出した。パネラーは、自分がまとめたものを発表し、その後に質疑応答を行った。

パネラー1：僕は、楽市・楽座の政策だと思います。信長は全国統一をするためには、強力な武力によって全国の戦国大名を倒そうとしたと思います。それには、たくさんのお金が必要で商業を盛んにすることでお金を集めようとしていたのだと思います。ですから、この政策が最も有効だったと思います。

パネラー2：私は、刀狩だと思います。秀吉の行った刀狩によって、刀や鉄砲が取り上げられ、戦ができなくなって平和な世の中になり全国が統一できたと思います。

パネラー3：私は、太閤検地だと思います。田の広さや全国の石高を決めることによって、年貢の確保ができるようになって、社会が安定したと思います。

パネラー4：僕は、関所の廃止だと思います。これは楽市・楽座と関係していますが、関所を廃止することによって、商人の行き来が自由になり、商業が発達したと思います。ですから、楽市・楽座ができるのもこれをまずやったからだと思います。



発表するパネラーの生徒

パネラー 5 : 高松城の水攻めは、兵糧攻めによって戦死者を出さずにすみしました。これは、戦国大名にとって大変有意義だったと思います。時間はかかりますが、相手も戦わないで降伏するわけですから、お互いにダメージが少なくて効果的な戦法であると思います。

パネラー 6 : 長篠の戦いは、鉄砲を使った初めての戦いです。これによって、信長は全国統一への足掛かりを築きました。武田の騎馬隊を破ったことは、信長の名を全国に知らせるよい機会だったと思います。これに勝ったことで、信長も全国統一ができるんじゃないかと自信をもったと思います。ですからこの戦いだと思います。

パネラー 7 : 私は、鉄砲の伝来だと思います。パネラー 6 は、長篠の戦いと発表しましたが、鉄砲が伝わっていなかったら、この戦いはできなかったわけですから、ポルトガル人によって鉄砲が伝えられたことによって全国統一ができたのだと思います。

パネラー 8 : 信長はキリスト教を保護することで、仏教勢力に対抗しようと考えました。戦国時代は、僧侶が武装して大きな力をもっていたので、これを抑え込むことは信長にとって大きな課題でした。実際一向一揆を壊滅させるのに、10年以上の歳月を費やしています。ですから、キリスト教の伝来は、統一の大きな助けになったと思います。

パネラー 9 : 戦国時代の最強集団は、仏教勢力だと思います。信長が石山本願寺や比叡山と徹底的に戦ったのも、それを倒さないと統一はあり得ないと考えたからです。ですから、その強力な集団と戦うためにたくさんの武器が必要であったと思います。だから、一向一揆の壊滅によって統一ができたと思います。

質問者 1 : 長篠の戦いは重要な戦いではあると思いますが、信長の戦いの中でそれが一番重要である根拠は何ですか。

パネラー 6 : パネラー 7 の人が言ったように、鉄砲が伝わったことが大きいと思いますので、鉄砲を使った最初の戦いは、統一にとって大きな出来事だと思います。

質問者 2 : キリスト教の伝来は、そんなに重要ではないと思います。なぜなら、秀吉は途中でキリスト教を禁止しているし、信長も仏教勢力に対抗するためにキリスト教を利用しただけであって、キリスト教でも何でもよかったのだと思います。

パネラー 8 : 僕もみんなの発言を聞いて、そうかなと思いました。他の人の意見の方が説得力があったと思いました。

質問者 3 : 僕はみんなの意見を聞いて思ったのですが、結局お金が必要だったのではないかと思います。今の政治でもそうですが、貧乏な国では戦争や内戦があり、お金がある国では、平和で国民がよい暮らしをしているので、すべてをまとめるとお金だという気がします。

本時の授業では、様々な意見がパネラーから出され、有効な政策について生徒たちは静かに聞き合うことができた。戦国時代は、数々の武将が乱立していた時代であるから、統一するには強力な軍事力が必要であった。当時鉄砲の有効性に気付き、いち早く配備しようと考えた人物は信長であった。しかし、武装していたのは武将だけでなく、僧兵をもつ仏教勢力もだった。信長はこれを屈服させるために、キリスト教を利用した。南蛮人のキリスト教の布教と思惑が合致したのである。これはパネラー 8 や質問者 2 に見られる意見である。二つの意見は対立



パネラーに対する質疑応答の様子

しているように見えるが、言いたいことは同じである。更に意見を戦わせることができれば、理解が

深まったと思う。また、統一のための資金の必要性を認識していたのは、質問者3と生徒A（下の【Aの感想1】を参照）だった。ただし、問題点はお金を得ることだけが目的だったと考えていることだ。お金は戦争に勝つための鉄砲を手に入れる手段に過ぎない。そのところをもう少し突っ込んで考えてほしかった。

全体的にパネラーの意見は、学習したことがよく押さえられており、独自に調査した資料を使って説得力のある内容だった。それに対して意見交換が少なかった理由は、理解はしているのだが発言に至らなかったことと考えさせる活動が十分ではなかったことが挙げられる。今後は、まとめる作業や発表する機会を多くすることで、自分で考え想像する活動を増やす必要性を感じた。

イ 抽出生徒の変容

抽出生徒Aは、帰国子女で英語が堪能であり、授業中の発言も多くクラスに与える影響も強い。一方で、反抗期を迎え、素直に指導に従わないこともあり、問題行動を引き起こす生徒ともつながりがあり、学校生活の中で心配を抱える生徒の一人である。生徒Aは、授業でよく発言をし、素晴らしい内容も多いが、また極端にマイナス発言をすることもある。それは、家庭での生育環境や友達関係に起因する、偏った考え方や物の見方の狭さにあるのではないかと推測される。本時では次のように発言した。

【Aの感想1】結局なんだかんだと言ったって、お金が無いと何もできないし、信長や秀吉も金持ちになりたくて、全国統一を目指したということでしょ。大人って結局きれいごとを言っているけど最後はお金なんだよね。

生徒Aはすべてのことをお金に収束させようとしている。だが、話合いが進む中で少しずつではあるが、他の考えを知ることができ、最後の感想は次のように書いている。

【Aの感想2】たくさんのことから理由を一つに絞るのは、無理なんじゃないの。だってどれも少しは関係しているわけだし。どうして武士はそんなに天下がとりたいの。でも、みんなの意見を聞いて少しは勉強になったけど。

この発言から、お金に執着していたAが政策や戦いの意味に気が付き、今までと違った見方ができるようになったことはよかったのではないかと考える、それは、①他の生徒と違った視点から分析を加えていること、②最も有効な政策や戦いを一つに絞ることはできないと考えていること、③みんなの考えを聞いて自分の考えが修正されたと感じていることから推測することができる。

ウ その後の取組

パネルディスカッションを実施した後、総合的な学習の発表会に向けて、環境問題について取り組んできた成果を個々の生徒がまとめを行った。社会の時間で学習したことをうまく活用してまとめる生徒もいれば、まとめ方が分からず成果が上がらない生徒もいた。生徒Aは、環境問題を引き起こす原因は人間にあると考えた。鋭い指摘ではあるけれども、ではどのように改善していくのかという視点はもてないままであった。どうせ何をしても同じというあきらめ感が強い。前向きに考えることができるように今後も、生徒Aを支援していくつもりである。

(2) 1次実践の成果と課題

実践を通して検証できた成果と課題は次のとおりである。

ア 実践の成果

- ・全員がパネラーとして発表原稿を考えることで、それまでの学習を振り返ることができ、通常の学習よりも理解が深まり、思考力、判断力、表現力の向上が見られた。
- ・学習プロセスの一つである「発表」（豊かな説明活動）の場として位置付けた「パネルディスカッション」を行うことで、聞く態度や話す態度が育成され、学習のスタイルが幅広くなった。

- ・話し合いや意見を練り合う中で、意識の変容が見られたり、歴史事象を幅広くとらえたりすることができた。また、楽しい雰囲気の中で学習を進めることができた。
- ・下に生徒の感想を示したが、パネルディスカッションをまたやってみたいという生徒の話し合いに対する意識の高まりを感じることができた。

私は話し合いの授業を通して、いろいろな考えがあることが分かりました。人の考えを聞くことはいいことだし、自分の気付かないことがたくさんあるので、これからも積極的に話し合いに参加してみたいです。

(単元を終えた生徒の感想)

イ 実践の課題

- ・単元構想の段階では、パネルディスカッションをプラス1時間として考えていたが、実質は準備の時間に1時間とられ、他のクラスより2時間余分に必要になった。足りない時間は、学活、総合の時間で対応したが、時間的問題をクリアしないとどの単元でも実施するというわけにはいかない。
- ・意欲的に学習している生徒にとっては、理解が深まる機会となったが、意欲が低い生徒や能力の低い生徒にとっては、あまり有意義な活動にはなっていなかった。意見を述べたり質問をしたりする生徒は限られており、そのような生徒に対する支援をどのように行っていくかが課題である。

(3) 第2次授業実践 対象2年7組 36名 平成20年6月実施

第1次授業実践のまとめの場であるパネルディスカッションは、学力上位の生徒をパネラーにすることで、中・低位の生徒にまとめ方や発表の仕方などを学ばせることにより、全体の底上げを図った。しかし、パネラー以外の一部の関心の低い生徒は積極的に取り組むことができず、どのような支援をするかという課題も残された。これを受けて第2次実践では、生徒同士のかかわりを増やし、全員がかかわりあえる授業を展開するために全体討論会を計画した。具体的には、日露戦争を学ぶ単元に工夫を加え、自分の考えを確かにもち、友達の見解を自分に生かしたり、より高次の意見に修正したりできるような授業展開を考えた。そのためには、学習プリントにより、段階的に考えを高めさせ、意見をかかわり合わせることが必要と考え、全体討論会を計画して、指導案の検討に入った。

教科書に沿って授業を展開すると、日清戦争では多額の賠償金を手に入れ、日本はそれを軍事費に回したり、八幡製鉄所を建設したりして、国力を増強することに成功したことが分かる。ところが、次の日露戦争では、17億の戦費を投入したにもかかわらず、賠償金が手に入らず、日本国内で暴動が起こっている。その不満をそらすために韓国を併合したとも考えられる。



全体討論会の様子

読解力を高める授業とは、多面的・多

角的に思考し、新しい解釈を加えることができる授業ではないかと考え、「日露戦争によって最も利益を得た国はどこか」をテーマにした全体討論会を構想した。

〔抽出生徒〕

部活動や家庭学習・学校生活に前向きに取り組むことができる抽出生徒Bは、他教科が得意なのに、なぜか社会科の成績は中位である。数学科では、方程式を筋道だてて容易に解くことができるが、歴史

事象を整理して考えることは苦手である。そのため、発言はするが自信をもちきれていないようである。明るく活発な生徒なので、生活ノートや学習プリントの中でアドバイスをしたり、放課や授業後に声を掛けたりしながら、学習支援をしていきたい。

資料3 単元構想図

1 単元名 日清・日露戦争と近代産業

2 単元構想（7時間完了）

生徒の現状 ・ 他人の考えと比べて自分の意見を発表することが苦手な生徒		
出 合 う	欧米列強の帝国主義について考えよう	【＊読解力向上の手だて◆評価】 ＊1 欧米列強の帝国主義政策について理解できるようにワークシートなどを活用する。(理解力) ◆1 欧米列強の帝国主義政策に気づき、学習の見通しをもつことができる。
	① 欧米列強のアジア進出について考えよう ＊1 ・欧米列強は植民地獲得競争をしていたんだ。 ・日本は不平等条約を改正しなかったんだね。 ・日本と欧米列強の駆け引きが知りたいね。	
深 め る	日清・日露戦争について考えよう	＊2 日清戦争や日露戦争について調べた内容が具体的に becoming するように根拠を明らかにさせ、資料の活用や分類ができるように生徒に応じた指示を出す。(思考・判断力) ＊3 日露戦争に対する欧米列強の思惑に着目し、図を活用して考えるように促す。(表現力)
	② 日清戦争について調べよう ＊2 ・朝鮮の支配を日本と清が争ったんだね。 ・日本が清に勝って、朝鮮を独立させたんだ。 ③ 日露戦争について考えよう ＊3 ・日本は大国ロシアに勝ったんだ。 ・戦争に勝っても日本が得したわけではなかった。 ④日露戦争で最も利益を得た国を考えよう(本時) ＊4 ・どの国が一番得をしたのだろう。 ・イギリスが日本の背中を押して得をした。 ・アメリカが仲介して得をした。 ・ロシアは賠償金を払っていない。 ・日本が中国の鉄道利権をもらって得をした。 ⑤ 日露戦争後の韓国と中国を調べよう ＊5 ・戦後、日本は韓国を日本の一部にしたんだ。 ・日清・日露戦争が日本の帝国主義を推進したんだ。	
生 か す	日本の近代産業・近代文化について考えよう	◆2 日清・日露戦争と朝鮮・満州への進出を理解できる。 ＊6 具体的な特色を挙げ産業革命について考える場とする。(思考・判断力) ＊7 日本の近代文化・西洋文化について理解を深め合う。(理解
	⑥ 日本の産業革命について話し合おう ＊6 ・軽工業から産業革命が起こったんだ。 ⑦ 日本の近代文化について話し合おう ＊7 ・日本文化と西洋文化が発展したんだ。	

・発表を聞いて、近代化の様子が分かったよ。	力)
	◆3 2度の戦争と大陸進出から日本の近代化について意見を交換することができる。
熟達していく生徒の姿 ・既習の学習を基に資料を活用して意見を交流し、自分の考えを深められる生徒	

資料4 全体討論会の構想（第7時）

本時の目標

- ・日露戦争によって、最も利益を得た国はどこか考え、話し合い発表することができる。

展開

学 習 活 動	教師の支援と留意点 【 】学習プロセス
1 日露戦争によって、最も利益を得た国はどこか考え、発表する。(既習事項から) 日露戦争によって、最も利益を得た国はどこかを発表したり聞いたりしよう	○日露戦争によって、最も利益を得た国について分かりやすく発表ができるように以下の視点を与える。 【事実認識・解釈】 ・なぜその国が最も利益を得ると考えたか。 ・その根拠（事実）は何か。
2 発表を聞いて質問する。 発表を聞いて分からないことを質問しよう	○発表を聞いて、疑問に思ったことや分からなかったことを確認しながら話し合いができるようにする。 【事実認識の拡張・解釈】
3 日露戦争によって、最も利益を得た国はどこかを全体で話し合う。(全体討論会) 日露戦争によって、最も利益を得た国はどこか、そう考える理由も明らかにして話し合おう。	○各自の意見を踏まえ、学級全体の話し合いを展開していく。話し合いでは、日本やアメリカ、ロシア、イギリスの思惑を中心に、よりの確な理由についての話題に広げていきたい。それによって、思考力が深まっていく様子を見守りたい。 【発表】
4 全体討論会での意見を聞き、その感想を発表する。 友達の意見を聞いて、あなたはどう思いましたか。	○自分が最初に考えた理由が全体の話し合いの中でどの程度重要であり、どのように扱われたかに気付き感想が書けるようにする。
5 本時を振り返ろう。 日露戦争後の世界情勢を、本時を振り返っておさえましょう。	○日露戦争は、日本とロシアだけではなく、イギリスやアメリカなど様々な国の思惑が錯綜^{さくそう}する中で行われたこと、その結果によって世界の勢力地図がつくられていったことに気付き、日本の帝国主義政策に拍車が掛かったことを理解できるようにする。 【認識の深まり】

評価

評価方法	おおむね満足できる (B)	十分満足できる (A)
・ワークシート ・授業の発言	既習のことから、自分自身の考えをもち、日露戦争によって、最も利益を得た国について考え、話し合い発表することができる。	日露戦争は、日露の思惑だけでなく、様々な国の利害が絡み合っていることを理解し、考えを発表することができる。

ア 全体討論会 最も利益を得た国はどこか

授業の前に予備調査を行ったところ、最も利益を得た国は、アメリカ23名、ロシア6名、日本5名、イギリス1名であった。アメリカは建国して100年余り、講和条約の仲介をしたといっても、まだまだ絶対的な国力を保持していたとは言えず、生徒たちは現在の強いアメリカの印象やペリーの来航で幕府が混乱した事実からアメリカ支持に流れていったのではないかと思う。

生徒a：僕はイギリスだと思います。イギリスはロシアの南下を警戒していました。そのために、日英同盟を結んで、日本に代わりに戦わせたと思います。
(発言ではなく、プリントに)

T1：生徒Aの意見についてどう思いますか。

生徒b：確かにそうかもしれませんが、私は、ロシアの方が得をしたと思います。なぜなら、戦争に負けたのに賠償金を払わなくて済んだからです。

生徒c：私も生徒Bの意見に賛成です。そして、それはアメリカの仲介があったからだと思います。

生徒d：僕は日本が一番得をしたと思います。樺太や中国の鉄道利権を得たことは、その後の侵略に大きく役立ったと思います。

生徒e：日露戦争では得をしませんでした。その悔しさから韓国を併合できたと思うから、やはり日本は得をしています。

生徒f：絶対にアメリカだと思います。アメリカは戦争に参加していないし、日露戦争の講和条約は、アメリカのポーツマスで行われました。アメリカが日露戦争を引き分けにしたと思うから、一番得をしていると思います。

生徒g：アメリカのシナリオどおりになったから、一番得をしたのはアメリカだと思います。

T2：友達の意見に質問や疑問はありますか。

生徒h：アメリカの言うとおりに日本やロシアがしたということは、アメリカが一番強かったのではないかと思います。ですから、アメリカです。

生徒i：強かったから言うことを聞くというのは分かります。でもそれと得をすることは違います。

生徒j：生徒Eに質問します。韓国を併合すると何か得があるのですか。

生徒e：それはうまく言えません。

生徒k：先生、フランスやドイツも関係あるのですか。

T3：いいことに気付いたね。それも含めて考えてみようよ。



アメリカについて発表する生徒

授業記録から発言内容を分析すると、前者の意見に同意したり（生徒c、生徒e、生徒gの発言）、反論したり（生徒b、生徒i）、質問したり（生徒j）することができており、生徒同士がかかわり合

い、意見の交流を進めることができていた。また、自分の考えを言うとき、根拠を明確にしようという意思がはっきりわかる発言が多かった。

考えの深化という観点から見ると、ロシア、日本の生徒の数は変わらなかったが、アメリカ支持の数が4名減り19名となった。その4名がイギリス支持に回った。日英同盟が結ばれていたこととアメリカが得をしたという理由に十分な根拠が見られなかったことが理由であると推測している。根拠のはっきりした意見に生徒が心を動かされる傾向が明らかになった。

全体の話合いで発言できた生徒は36名中19名であった。この発言者数は、普段の授業に比べるとかなり多い。その理由を考えてみると、一つには机を対面させたり、小グループで相談させたりしたことで、話しやすい雰囲気が出たことが挙げられる。また、下位の生徒も学習プリントに書くことで段階的に自分の考えを構築することができ、話合いにある程度の自信をもって参加することができたと思われる。抽出生徒Bは授業後の感想を次のように書いている。

話合いに参加して社会の勉強が楽しくなりました。これからもグループで話し合ったり、個人で調べて発表したりしたいと思います。私は戦争に負けても賠償金を支払うことがなかったロシアが得をしたと思います。(生徒Bの感想)

抽出生徒Bは、「話合いに参加して社会の勉強が楽しく」なったと言い、少々苦手意識が緩和されたことがうかがえる。また、生徒Bはロシアが一番利益を得たと考えていた。話合いの結果、本人の考えが変わることはなかったが、「ロシアと敵対していたのは、アメリカだけでなくイギリスもだった」という生徒aの発言によって、4人の生徒の考えが変わったことは事実である。

オ 学習プリントの工夫

講義形式の授業では、板書を写したり、他人任せにしたりして積極的に授業にかかわれないことが多い。そこで、学習プリントを使って授業を展開した。考える場面では、自分の考えや友達の意見を詳細に記述することで、自分の考えを振り返り、より広く深く考えるための手だてとなった。発表を聞き合う中で、友達の考えを取り入れ、自分の考えを見直す生徒も増えるようになった。さらに、こちらが朱書きを加えて問い掛けることで、学習への追究意欲が深まるように支援した。その結果、図1に示したように下位の生徒も考える活動に積極的になっていった。

図1 学習プリント

日露戦争で最も得をした国
2年7組

○最も得をした国と理由を書こう。

日本

理由
韓国が手に入れた。1910年に韓国を併合できた。

○友達の見解で賛成できること。
①戦争をやらないか思い通りになった。アメリカ
②ロシアは、負けたのに被害が少なかった。お金を払った。
③戦争で大量の戦費をつかちえた。アメリカ
④よく分からないこと。質問したいこと。
①アメリカに反撃できない。アメリカ
②アメリカとイギリスは、仲良くする
③韓国を併合して何の利益があるか？
韓国の金、武器、土地、資源
④話し合いで分かったこと。気づいたこと。
①日本は、アメリカがイギリスに金を出して戦争を仕掛けていたから。
②最も得した国ではないと思えた。
③一つ一つの国の考えがわからなかった。よく分からない。
④話し合いで考えが変わった人はもう一度、国と理由を書こう。

アメリカ

理由
日本は、ロシアで経済的ダメージを受けた。ロシアは、バルチック艦隊を大被害を受けた。イギリスは、日本にロシアに戦争を命じた以外に何もなかった。アメリカは、戦争で金をつかちえた。

友達の発表を聞いて考えが
変わりました！

(4) 実践の分析

ア パネルディスカッションと全体討論会の比較

観 点	パネルディスカッション	全体討論会
時間的制約	資料を作るのに時間がかかった。 調べる時間を考えると余分に時間がかかる。	授業の延長として取り組むことができた。準備に時間はかからない。
生徒の取組	パネラーについては、意欲的に取り組んでおり、発表もしっかりしていた。パネラーの発表を聞く生徒については、自分が調べたことと一致しないことも多く、積極的に質問や意見を述べた生徒は少なかった。	発表については、ほぼ半分の生徒が意見を言うことができた。違う意見を聞いて、自分の考えに取り入れたり、修正を加えたりする生徒も見られた。
生徒の反応	まとめたり文章を書いたりすることが苦手な生徒は、解釈が深まらず、人の考えを批判するだけで終わっていた。表現力が豊かな生徒は、意欲的にまとめ、友達の意見に共感し、判断力が向上したように見受けられた。表現力に優れた生徒ほどよい反応が見られた。	パネラーの基調提案がない分、たくさんの生徒から多くの意見が出された。質問に対する批判的な意見はあまり出されず、共感的に話合いが行われた。より高度な観点から議論が進められたわけではないが、お互いが納得し、温かい雰囲気の中でかかわることができた。
読解力の向上	パネラーや積極的に質疑応答に加わった生徒については、解釈する力が深まった。ここではそれを思考力と考えている。そのような生徒の特徴として、社会科の学習に関心があり、資料もよく読んでいる。	思考力は、低位の生徒から意欲の高い生徒まで、平均して伸びた感じがある。全体で進める議論の中に、発言の有無にかかわらず加わったことで、人の意見に影響を受け合っていた感覚があった。
反省点	表現力に優れた集団であるならばこの手法は効果があるやり方であったと思われる。ただ、本学級は関心の高い生徒と低い生徒で二極化しており、パネルディスカッションは、学級に合っていたかと考えると疑問が残る。学級の実態を考えて、授業形態を考える必要があった。	落ち着いて考えることができる集団であり、共感的に話し合うことができるので、全体討論会は、意義あるものになった。反省点としては、より高次の話合いを行い、読解力を深めていくために、1～2人の基調提案を行い、そこから全体の話合いに移ってもよかったのではないかと考えている。

意見の交わりの場であるパネルディスカッションと全体討論会を比較・検証することで、どちらの方法にも短所と長所があり、学級の実態に応じてよりよい方法を選択したり、改善を加えたりしながら取り組んでいくことが大切であることが分かってきた。また、読解力の育成という点では、繰り返し振り返ることで、下位の生徒も基礎・基本を定着させることができ、思考・判断力、表現力を伸ばすことができることを再認識した。

(5) 2次実践の成果と課題

実践を通して検証できた成果と課題は次のとおりである。

ア 実践の成果

- ・全体討論会を行うことで、一人一人が積極的に学習に参加することができ、通常の学習よりも理解が深まり、少数ではあるが意見の変容が見られた。
- ・学習の振り返りを行うことで、意識や考えが深まり、低位の生徒の表現力の向上や発言回数の改善が見られた。
- ・自分とは異なる考えを聞き合う中で、他人の意見に共感したり、歴史事象を違った視点からとらえたりすることができた。また、温かな雰囲気の中で^{しんし}真摯な討論ができた。
- ・どの生徒も話し手の主張を確認することができた。

イ 実践の課題

- ・全体討論会においては単元構想の段階で、一つの国に集中することがないように前時までの構想を考えていたが、アメリカに傾いた考えを、大きく変えることができなかった。話合いの様子をうまくとらえて適切な助言や支援を行えば、もう少し違った展開になっていったことを考えるとやや残念であった。
- ・発表することが苦手な生徒も、書く作業を通して話合いに参加することができた。その反面、自分の考えに自信をもって、話を展開していく生徒があまり見られなかったのは、表現指導や文章指導が十分でなかったために、生徒に自信をもって発表させることができなかった点に不満が残る。
- ・全体討論会に取り組んで、意見交流が難しいことを実感した。言語力の育成は、国語科の学習と密接につながっている。自分の考えを発信していくとき、文章で表す力は、まさに自国語を十分に使いこなせなければ始まらない。言語力の育成は、今後の社会科教育の課題でもある。



質問に答える生徒

5 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

単元終了後に生徒を対象にアンケートを行った。そこから次のようなことが分かった。

まず、話し合うことで理解が深まったと答えた生徒が25名（70%）であった。生徒は、話し合うことが理解を深めるのに役立ったと考えている。（資料5 質問1）また、考える授業を続けることは有効であると答えた生徒が24名（67%）であった。（資料5 質問2）

資料5 単元終了後のアンケート（実施：平成20年7月）

質問1 話し合うことで理解が深まりましたか？
①十分深まった 4名 ②少し深まった 21名 ③変わらない 9名 ④分からない 2名
質問2 考える授業を続けると社会科の力が付くと思いますか？
①確実に付くと思う 4名 ②付くと思う 20名 ③付かないと思う 3名 ④同じ 9名
質問3 全体討論会のような授業はどうでしたか？
①よい 8名 ②講義中心の授業がよい 19名 ③ドリル学習がよい 1名 ④同じ 7名

パネルディスカッションも全体討論会も自分の考えをまとめ、発表する活動である。話し合いの場に臨むために、これまでの学習を整理・統合する。そして、自分の考えを構築し、意見を発表し交流し合う中で、お互いを高め合う。このような、資料の分析・解釈→意見の構築→発表（説明活動）という学習プロセスを大切に学習の展開により、生徒の意識にも変化が見られ活発な話し合いも可能になったと思われる。

（2）研究の課題

学習プロセスを重視した授業を展開する上での今後の課題は以下の点である。

- ・考える時間を確保するための方法を確立すること。
- ・単元構想の工夫を行い、読解力が高まる支援を行うこと。
- ・学習プリントの改良やパネルディスカッションの改善を行うこと。
- ・何でも言い合える温かな学級集団を育成していくこと。



資料を見て話し合う生徒たち

全体討論会のように発表中心の授業についてよいと答えた生徒が少なく、講義中心の授業の方がよいと答えた生徒が圧倒的に多かった。（資料5 質問3）授業の感触としては悪くはなかったと考えるが、考え、説明する過程を重視する授業の形態に慣れていないことが原因にあるのではないかと推測する。大切なことは、我々教師がこのような授業を積極的に進めていくことではないだろうか。先ほども述べたように、多くの生徒が、考える学習は大切であると考えている。生徒自身も有効であると認識しているわけであるから、慣れることで学習効率を上げることができるだろう。時間的な問題は、単元構成を工夫したり、学習プリントを改良したり、授業の中で考える場を意識して設定したりすることで、解消できるはずである。

おわりに

読解力は、簡単に育成できるものではない。物事をよく観察し、判断し、考え、発表する力は、毎日の習慣と地道な努力によって培われていくものである。研究を行って感じたことは、学習習慣が定着すれば、生徒は十分に力を出せるということである。そのためにも、我々は不断の努力によって生徒の力を引き出すことが必要である。今後も社会科の授業では、資料を解釈し、意見を書き、考え、発表する活動を大切にして読解力の育成に努めていきたい。